

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第29集

明戸南部遺跡群 I

1991. 3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第29集

あけとなんぶ

明戸南部遺跡群 I

1991. 3

深谷市教育委員会

序

深谷市の北半部は、利根川の恵みによりもたらされた肥沃な妻沼低地が広がっております。豊かな穀倉地帯であるとともに、深谷葱に代表される野菜生産が極めて盛んな地域であり、この地に立って眼前に展開する赤城山などの山々を眺めるとふるさと深谷の大地を踏みしめる喜びが胸に沸き起こってまいります。

このたび、この豊かな地の東側を占める明戸地区で、総面積 106 ha に及ぶ大規模な原當は場整備事業が実施されました。我が国の産業構造が著しい変化を遂げつつある中で、地元の人々の農業への変わらぬ情熱が成さしむる大事業であり、こうした熱い思いこそが県内市町村随一の深谷市の農業を力強く支えていることを改めて実感いたしました。

この地は、遙かに遠い古代より、その豊かな生产力が人々の求めるところであつたらしく、数多くの遺跡があることが確認されております。ほ場整備事業の実施にあたり、遺跡の記録保存を図るべく発掘調査を行い、非常に大きい成果を挙げることができました。なかでも上増田古墳群は、その存在が初めて確認されたものであり、本書はその調査成果をまとめたものです。必ずしも郷土史研究の一助になりうるものと考えております。

最後に、発掘調査にあたっていろいろと御尽力をいただきました関係者の皆様に、心より感謝申し上げ、序といたします。

平成 3 年 3 月

深谷市教育委員会
教育長 烏 塚 恵和男

例　　言

1. 本書は、埼玉県深谷市内における、昭和63年度から平成元年度に現地発掘調査を実施した、県
営は場整備事業（明戸南部地区）に伴う遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は深谷市教育委員会が主体となって実施した。
3. 本書には、対象となった遺跡のうち、上増田古墳群の発掘調査成果について収録した。
4. 本書の執筆・編集及び写真撮影は澤山晃越・古池晋禄が行った。なお、執筆分担は下記のとお
りである。
I～III章、IV章の1～9号古墳跡－澤山晃越　　IV章の10～12号古墳跡－古池晋禄
(IV章の執筆分担は、現地発掘調査の担当分担に基づいている)
5. 出土品・図面及び写真は深谷市教育委員会が保管している。

発掘調査の組織

調査主体者 深谷市教育委員会 教育長 烏塚恵和男
教育次長 坂本幸一郎（昭和63年度）
飯島光武（平成元年度）
永井新八（平成2年度）

事務局 深谷市教育委員会社会教育課 課長 飯島光武（昭和63年度、平成元年度兼務）
永井新八（平成2年度兼務）
課長補佐 橋本征彦（昭和63年度）
須長欣二（平成元年度、平成2年度）
文化財保護係長 田中島功
庶務係長 金子信子（平成元年度、平成2年度）
主任 関根広子

調査担当者 深谷市教育委員会社会教育課 主任 澤山晃越
主事 古池晋禄

目 次

序
例言
目次
グリッドについて

I . 発掘調査に至る経過	1
II . 上増田古墳群の地理的歴史的環境.....	3
III . 調査の概要	5
IV . 古墳跡と出土遺物	
1 . 古墳跡	7
2 . 出土遺物	24

写真図版

挿図目次

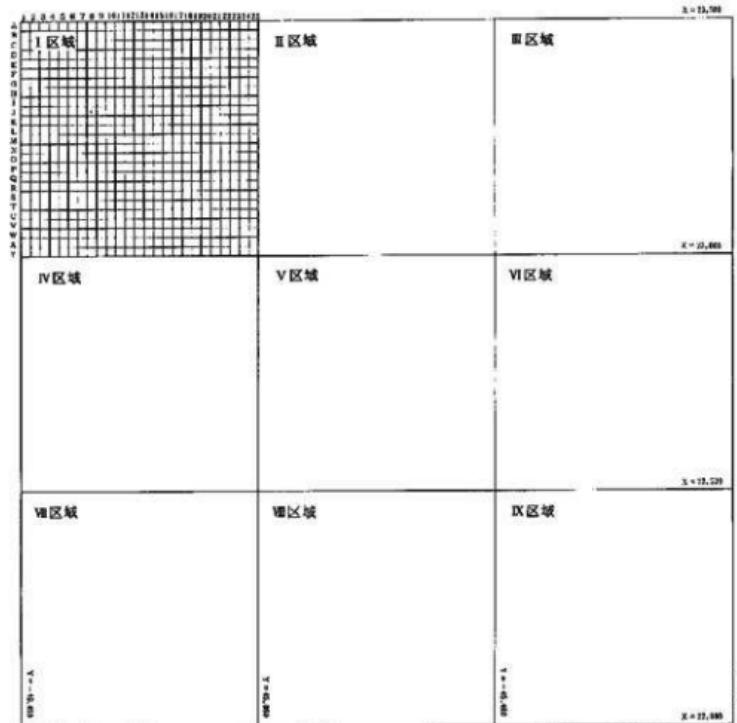
第1図 遺跡位置図	第12図 第9号古墳跡(1)
第2図 調査区周辺地形図	第13図 第9号古墳跡(2)、出土遺物
第3図 調査区分図	第14図 第10号古墳跡
第4図 第1号古墳跡	第15図 第11号古墳跡
第5図 第2号古墳跡	第16図 第12号古墳跡
第6図 第3号古墳跡	第17図 出土遺物(1)
第7図 第4号古墳跡	第18図 出土遺物(2)
第8図 第5号古墳跡	第19図 出土遺物(3)
第9図 第6号古墳跡	第20図 出土遺物(4)
第10図 第7号古墳跡	
第11図 第8号古墳跡	

※グリッドについて

昭和63年度・平成元年度の調査区域が極めて広範囲にわたるため、整理にあたって図上でグリッドを下記のように組み直した。報告文中の表記はこれによっている。

X Y座標上に、X=23,500・Y=46,460を基準とし、調査範囲全体を覆う1.5km四方の枠を設定し、これを500m四方9マスに分割、下図のようにI～IX区域とした。さらに各区域を20mピッチの25×25グリッドに細分し、北から南へアルファベットを、西から東へ算用数字を付して各グリッドを呼称することとした。

報告文中では、たとえばI区域のA-1グリッドは、I-A-1グリッドと表記した。



グリッド網図

I. 発掘調査に至る経過

深谷市は、東京都心から北西約74km、埼玉県北部に位置し、利根川を挟んで群馬県に接している。近代日本経済の礎を築いた偉人、洪沢栄一の生誕の地として、また、深谷ネギの産地として知られている。現在人口約94,000人、面積約69.4km²で、近年は東京への通勤圏として急速に都市化が進行しているが、野菜生産等も盛んであり、農業耕生産高はなおも県内市町村随一を誇っている。

昭和59年8月18日付け文書により埼玉県教育委員会から深谷市教育委員会へ、県営は場整備事業計画地区の埋蔵文化財の取り扱いについての通知があった。これにより、市教育委員会は市内大字上増田と大字宮ヶ谷戸のかなり広い範囲では場整備事業を実施する計画があることを確認、また、計画区域内でやむをえず現状を変更しなければならない場合には、事前に県文化財保護課及び市教育委員会に協議するよう、県文化財保護課長から県農林部耕地課長へ回答があったことを確認した。この事業計画地区には既に8カ所の遺跡があることが確認されており、市教育委員会は埋蔵文化財に関する検討を始めた。

昭和61年11月、は場整備事業を直接担当する埼玉県土地改良事務所から市教育委員会へ、昭和61・62年度に当該事業地区までの用水管を埋設し、昭和63～65年度に約106万m³の面整備工事を実施するという事業計画に関する連絡があった。この計画での埋蔵文化財に関する対応は極めて困難であることが予想されたが、取りあえず昭和62年度の用水管理設工事に関しては、8月6日付け文書による県深谷土地改良事務所長より市教育委員会教育長に発掘調査依頼に基づき9月11日に両者間で委託契約を結び、11月16日～12月26日に源訪台遺跡約750m²の発掘調査を実施した。

この間にも面整備工事が昭和63・64年度の2カ年度に短縮されるなどの計画変更があり、市教育委員会はそれまでの発掘調査担当職員が1名のみの体制では事業実施は不可能と判断、さらに1名の担当職員を採用するなど、体制の整備に努めた。

昭和63年度以降の発掘調査事業に関する経過は以下のとおりである。

昭和63年6月2日付け文書により土地改良事務所長から市教育委員会教育長に昭和63年度分の発掘調査が依頼された。昭和63年7月20日付けで埼玉県知事と深谷市長の間で委託契約を結び、面整備工事予定地内の用排水路予定地と舗装道路予定地約15,000m²の調査を7月25日から平成元年3月20日に実施した。

平成元年6月28日付け文書により土地改良事務所長から市教育委員会教育長に平成元年度分の発掘調査が依頼された。平成元年7月28日付けで埼玉県知事と深谷市長の間で委託契約を結び、面整備工事予定地内の用排水路予定地と舗装道路予定地約16,000m²の調査を7月28日から平成2年3月20日に実施した。

なお、上記の間も市教育委員会・県文化財保護課・県土地改良事務所・県農林部耕地課で協議を適宜重ねており、発掘調査の実施にあたっての経費負担は、農政側としての県委託金、さらに文化財側として国及び県の補助金と市単独負担の両者により分担した。

第1圖 道跡位置圖 (1/40,000)



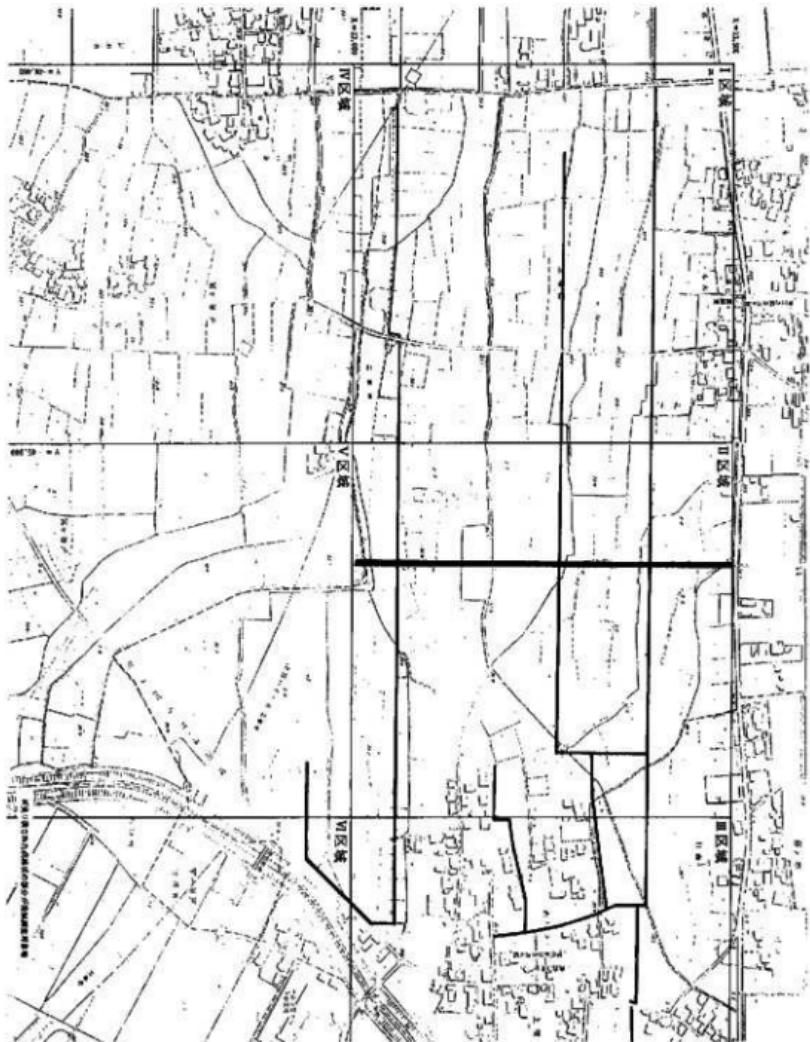
II. 上増田古墳群の地理的歴史的環境

上増田古墳群は、JR高崎線深谷駅の北東約4kmにある。現在墳丘などはまったく残されていないが、埴輪片の散布や石室の一部と思われる石材があることなどが知られ、以前から古墳があった可能性が高いことが指摘されていた。この度の発掘調査により古墳群の存在が証明され、具体的な内容が初めて提示されたものである。

上増田古墳群がある深谷市の北半部一帯は本庄市・岡部町から深谷市を経て熊谷市・妻沼町へ続く平坦広大な妻沼低地であり、上増田古墳群辺りでの標高は31~32mである。妻沼低地内は、現在は地場産業である瓦や土管、煉瓦等の原土採取や土地改良などによりかなりの部分が水田化されており、旧状を把握することは困難である。しかし、昭和57年度に実施された深谷市教育委員会による深谷市遺跡詳細分布調査により、利根川に平行するように東西に、主に古墳時代後期以降の遺跡が血洗島・矢島・大塚島・内ヶ島などの島のつく地名の土地を包括して帶状に連続している（上増田古墳群も含まれる）ことが確認された。ここを横断する国道17号線深谷バイパスの建設に伴う財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査により、この遺跡帶の内容は一層細密に明らかになりつつある。こうした状況は、現在では必ずしも明確ではない自然堤防の発達状況を遺跡が逆によく示したものといえよう。

さて、深谷市では、古墳時代後期の遺跡は数多く確認されている。特に前記の旧自然堤防上に集中的に集落跡が確認され、道路工事などに先行して発掘調査が実施されている。中では、県道工事に伴って埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した木郷前遺跡・東川端遺跡発掘調査、歩行者自転車専用道路工事に伴って深谷市教育委員会が実施した上敷免遺跡発掘調査の成果などが既に公表されている。しかし、整理分析中の国道17号線深谷バイパス・上武バイパス建設に伴う埼玉県埋蔵文化財調査事業団による数ヶ所の遺跡の膨大な成果が極めて大きなウェイトを占めることは明らかである。したがって、利根川旧自然堤防上の古墳時代後期集落跡の内容検討はそれらの成果発表を待つべきであり、ここでは、集落の所在場所が時期によって変遷しているらしいこと、古代における幡釋郡と榛沢郡の境界付近と考えられる上敷免遺跡の東側に遺跡が集中しており、当地域の都制施行の下地となつた状況を考察するうえで非常に興味深いことなどを指摘するに留めておきたい。なお、上増田古墳群があつた場所は、周辺に大集落跡があつたにもかかわらずほとんど古墳跡のみしか確認されず、完全に墓域として周辺から隔離されていたことが充分に推察しうる。

上増田古墳群とは対照的に、深谷市で以前から知られていたものとして木の本古墳群がある。木の本古墳群は、上増田古墳群の南約2km、櫛挽台地寄居面末端部上に点在する二十数基の古墳から成る古墳群で、埼玉県の重要遺跡に選定されている。もともとは相当な数の古墳があつたらしいが、戦後の開発によりほとんどが削平されてしまったようである。現在残っているのは径10~30mほどの円墳のみであり（8号墳は前方後円墳とされるが、筆者の調べでは、隣接する東方城跡の土堤の痕跡と思われる）、西はJR高崎線深谷駅の北北東約1kmの瑠璃光寺付近から東は熊谷市との境界付近まで、東西約2kmの範囲にわたっている。この古墳群の築造時期は、正式な発掘調査例がな



第2図 調査区周辺地形図 (1/7,500)

いので詳細は不明であるが、周辺に散布している埴輪の破片などを調べたかぎりでは6世紀中葉以降、上増田古墳群と同じ頃に構築されたものと考えられる。ちなみに昭和44年刊行の「深谷市史」によれば、昭和25年1月14日に幡羅地区城西にある火の見塚が家屋新築により半壊され、石棺が発見されるとともには完全な形態の頭骨が出土した。現在塚丘は半壊のまま残っており、頭骨は東京大学に保管されている。昭和30年5月に幡羅八幡塚古墳が農地整理のために破壊されたときにも人骨が出土した。また、瑞光寺には付近古墳から出土したとされる勾玉や金環が保管されている。

また、最近になって、上増田古墳群の南東約4km、JR高崎線籠原駅の北側で、区画整理事業に伴う熊谷市教育委員会の発掘調査により埋没状態の終末期古墳群が発見された。この中に極めて珍しい八角形の墳丘をもつ古墳が含まれていることが発表されて注目を集めた。

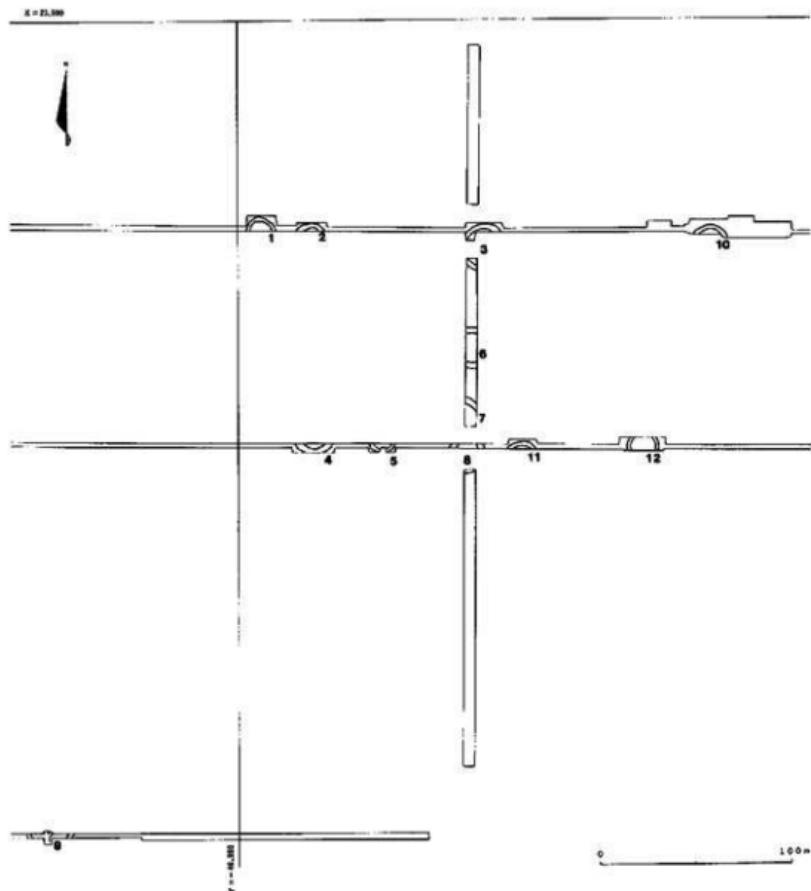
さらに周辺では、木の本古墳群の範囲の西端にある樟山神社と東端の熊谷市側にある西別府廐寺跡及び西別府祭祀遺跡（湯殿神社裏遺跡）が特に注目されよう。樟山神社は延喜式内社とされる古社で、木の本古墳群がある幡羅郡の總鎮守である。西別府廐寺跡は8～9世紀の遺跡で、最近の熊谷市教育委員会の発掘調査などにより、都寺にも比定しうるほどの規模と内容をもつことが明らかになりつつある。西別府祭祀遺跡は7世紀末～9世紀頃の遺跡である。いずれも当地域の古代の状況を考察する上で欠くことのできないものである。

なお、JR高崎線深谷駅の南約800m、櫛挽台地櫛挽面末端部に割田埴輪空跡があることも記しておきたい。6世紀中葉から後半頃に操業していたと考えられているが、この埴輪空跡で製作された埴輪の供給状況などは、今のところ明らかではない。

III. 調査の概要

調査は県営土場整備事業（明戸南部地区）に伴う発掘調査の一環として行った。舗装道路予定地及び用排水路予定地の調査であったため充分な幅が取れず、パワーショベルの表土除去で古墳跡が確認された場合には、可能な範囲で拡張して調査を行った。結果的に確認された古墳跡は12基にのぼるが、11基は周溝のみであり、1基だけ石室の一部も確認された。上記のような状況により各古墳跡の調査期間は連続していないため、記しておきたい。なお、現地の発掘も当報告書の記述も、第1～9号古墳跡は深出晃越が、第10～12号古墳跡は古池晋祥が担当した。

第1号	昭和63年10月12日～10月24日	第2号	昭和63年10月17日～11月9日
第3号	10月24日～11月10日	第4号	11月15日～12月2日
第5号	11月22日～12月2日	第6号	平成元年2月14日～2月24日
第7号	平成元年2月21日～3月2日	第8号	2月22日～2月28日
第9号	1月9日～1月24日	第10号	昭和63年10月14日～10月25日
第11号	昭和63年11月14日～12月20日	第12号	11月18日～12月21日



第3図 調査区全測区 (1/3,000)

VI. 古墳跡と出土遺物

1. 古墳跡

○第1号古墳跡（第4図）

II-F-1グリッドに位置する。周溝全体の約40%が調査しえたと思われる。周溝は、外縁が直径約15m、内縁が直径約11~12mと推定される。幅は1.5~2.3mであった。深さは現地表面から65~80cm、確認面から25~40cmであったが、北西と北東の2ヵ所にブリッジ状のやや浅い部分が認められ、確認面からの深さ15~20cmであった。底面は比較的平坦であった。

出土遺物は埴輪片や土師器片であるが、その数は極めて少なかった。なお、土師器片は、北東部のブリッジ状に浅い部分付近に比較的まとまっていた。

○第2号古墳跡（第5図）

II-F-2グリッドに位置する。周溝全体の約20%、凹窓の北端部のみが調査できた。発見された周溝は、外縁が直径約17~18m、内縁が直径約13~14mと推定される。幅は1.9~3.0m、であった。北端部が幅も狭く、やや浅くなつてブリッジ状になっていた。深さは現地表面から約90cm、確認面から約40cmで、ブリッジ状の部分が確認面から約20cmであった。

円筒埴輪片が少し出土したが、西方の内側に比較的まとまっていた。

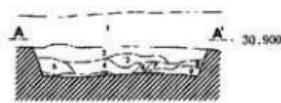
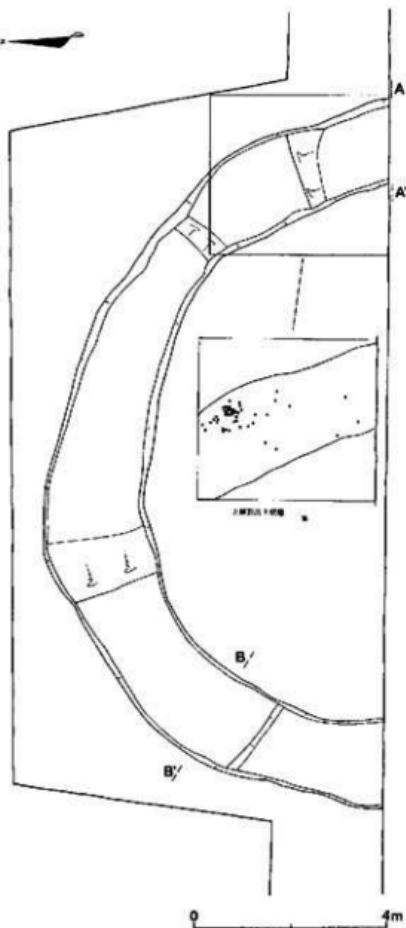
○第3号古墳跡（第6図）

II-F-G-7グリッドに位置し、西側を第5号溝跡に切られていた。周溝全体の約30%が調査しえたと思われる。周溝は、外縁が直径約21~22m、内縁が直径約19mと推定され、幅は2.0~2.5mであった。深さは現地表面から90~110cm、確認面から40~60cmであったが、周溝の底中央がさらに幅30~60cm深さ10~30cmの溝状になつてゐることが極めて特徴的であった。なお、周溝全体では西側がやや深くなつており、底中央の溝状部分は東側が深くなつていた。

埴輪片や土師器片などが出土したが、その量は極めて少なかった。

○第4号古墳跡（第7図）

II-L-2・3グリッドに位置する。周溝全体の約30%が調査しえたと思われる。周溝は、外縁が直径約22m、内縁が直径約16.5mと推定される。深さは現地表面から120~150cm、確認面から70~100cmでやや深く、底面は舟底状に少し丸くなつてゐた。幅は2.7~3.2mであった。埴輪片や土師器片が比較的数多く出土したが、底面より90~100cmのかなり高い位置から出土したものが多く、周溝の内側の墳丘にあたる部分からも同じようなレベルで遺物が出土した。

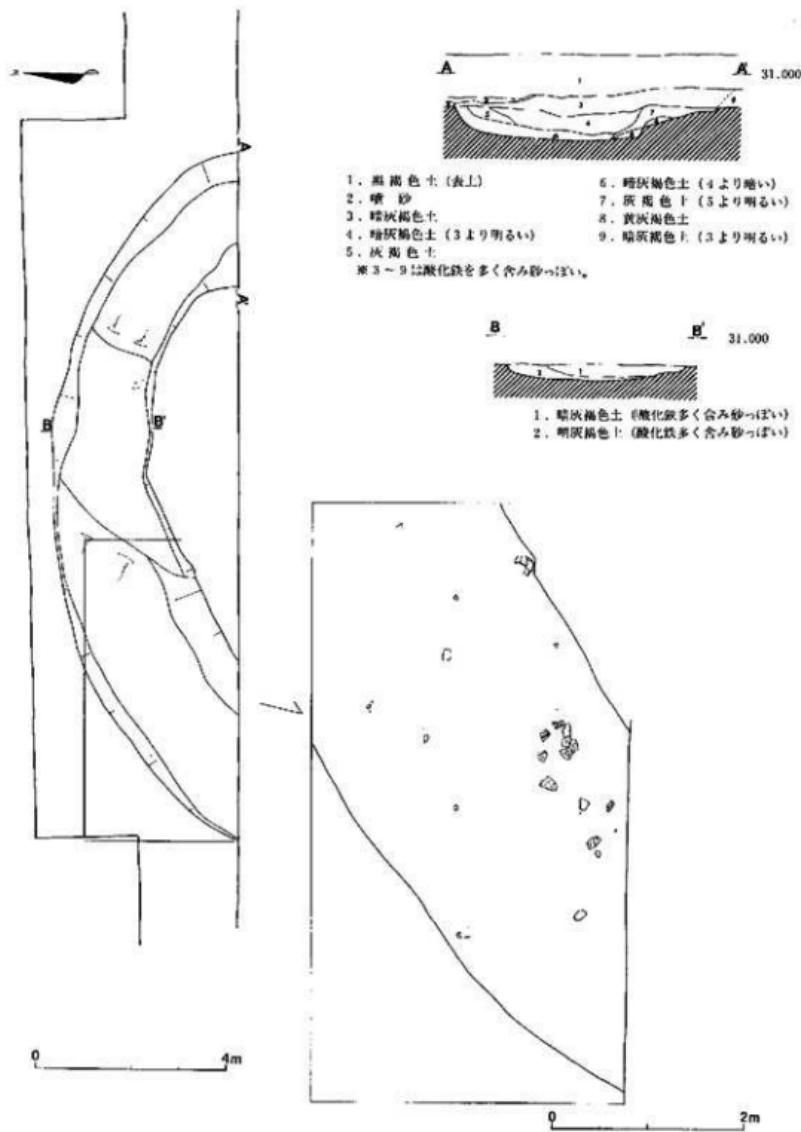


1. 黒褐色土 (表土)
 2. 淡褐色土 (砂を少し含む)
 3. 黒灰褐色土
 4. 淡褐色土 (粘土質。2より明るい)
 5. 明灰灰褐色土
 6. 淡灰褐色土 (3より明るい)
 7. 淡褐色土
 8. 灰色土 (粘土質)
 9. 明灰灰褐色土 (粘土質)
 10. 明黄灰色土 (9より灰色強い)
- * 6-10は酸化鉄を多く含む。

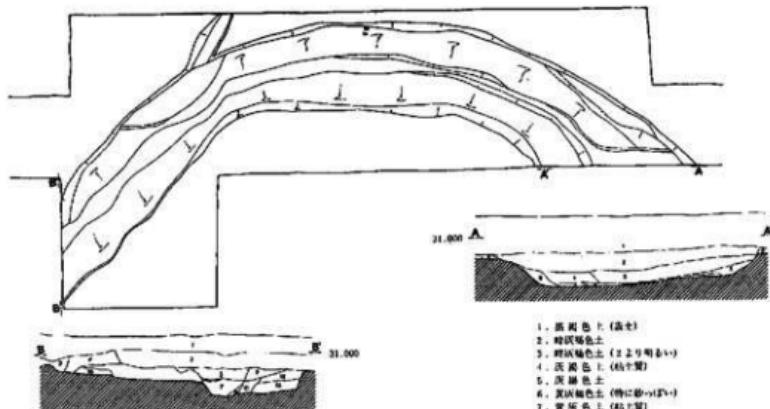


1. 暗灰褐色土
 2. 粘砂
 3. 灰白色粘土
 4. 明黄灰褐色土
 5. 明灰褐色土
- * いずれも酸化鉄を多く含む。

第4図 第1号古墳跡 (1/120・1/60)

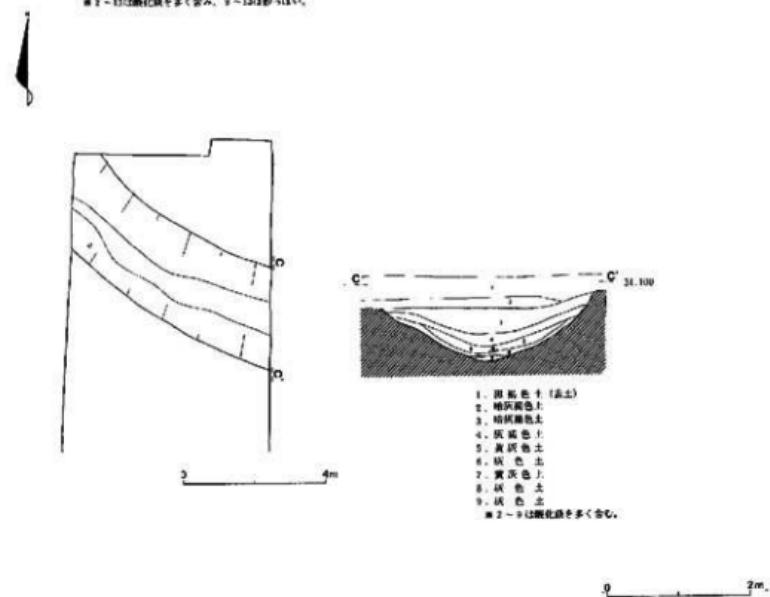


第5図 第2号古墳跡 (1/120・1/60)



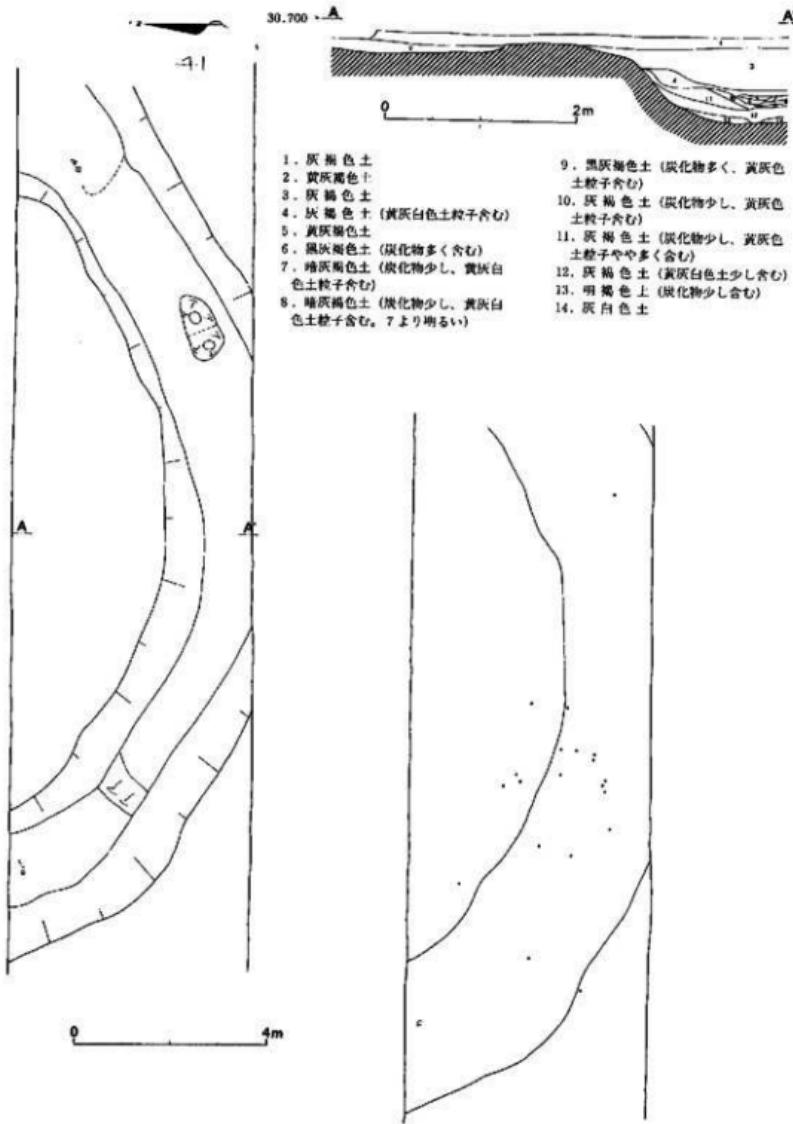
1. 黄褐色土(赤土)
 2. 棕褐色土
 3. 黑褐色土
 4. 黄褐色土
 5. 棕褐色土
 6. 砂
 7. 培灰褐色土(よりぬい)
- * 2～5は酸化鉄を多く含み、2～6は半砂漠的。

1. 黄褐色土(赤土)
 2. 棕褐色土
 3. 培灰褐色土(よりぬい)
 4. 黄褐色土(赤土)
 5. 黑褐色土
 6. 黄褐色土(特に砂少)
 7. 黄褐色土(粘土質)
 8. 砂
 9. 棕褐色土
- * 2～9は酸化鉄を多く含み、2～6は半砂漠的。



1. 黄褐色土(赤土)
 2. 地灰褐色土
 3. 培灰褐色土
 4. 黄褐色土
 5. 黑褐色土
 6. 黄褐色土
 7. 黄褐色土
 8. 黄褐色土
 9. 黄褐色土
- * 2～5は酸化鉄を多く含む。

第6図 第3号古墳跡 (1/160・1/80)



第7図 第4号古墳跡 (1/160・1/80)

○第5号古墳跡（第8図）

II-L-4・5グリッドに位置する。調査範囲の幅の狭さにより、単独の溝跡2基か周溝か不明であったため、この判断ができる程度に拡張して古墳の周溝であることを確認した。したがって、周溝全体の20%程度が確認できたのみである。周溝は、外縁が直径約14～15m、内縁が直径約11～11.5mと推定され、幅は1.3～2.0mであった。深さは現地表面から110～120cm、確認面から50～60cmで、底面は平坦であったが、凹凸や土塙状の部分なども認められ、西側の方が浅くなっていた。

○第6号古墳跡（第9図）

II-I・J-6・7グリッドに位置する。周溝の南北部分が対面で確認できたのみであり、周溝全体の10%程度しか調査できなかったものと思われる。外縁が約21m、内縁が14～15mと推定される。深さは現地表面から100～120cm、確認面から60～80cmで、底は舟底状に少し丸く、凹凸が認められた。

埴輪片が少量出土した。

○第7号古墳跡（第10図）

II-K-6・7グリッドに位置する。道路予定地の幅で周溝のごく一部が検出されただけであるため、規模等の詳細は不明であるが、南側の第8号古墳跡との関係などを考慮すると、外縁は直径18～19mほどと考えられる。幅は約3.5m、深さが現地表面から約150cm、確認面から約100cmと、他の周溝に較べてやや規模が大きく、底は舟底状に少し丸くなっていた。

埴輪片などが出土したが、原形に復元しうる円筒埴輪が1点あった。

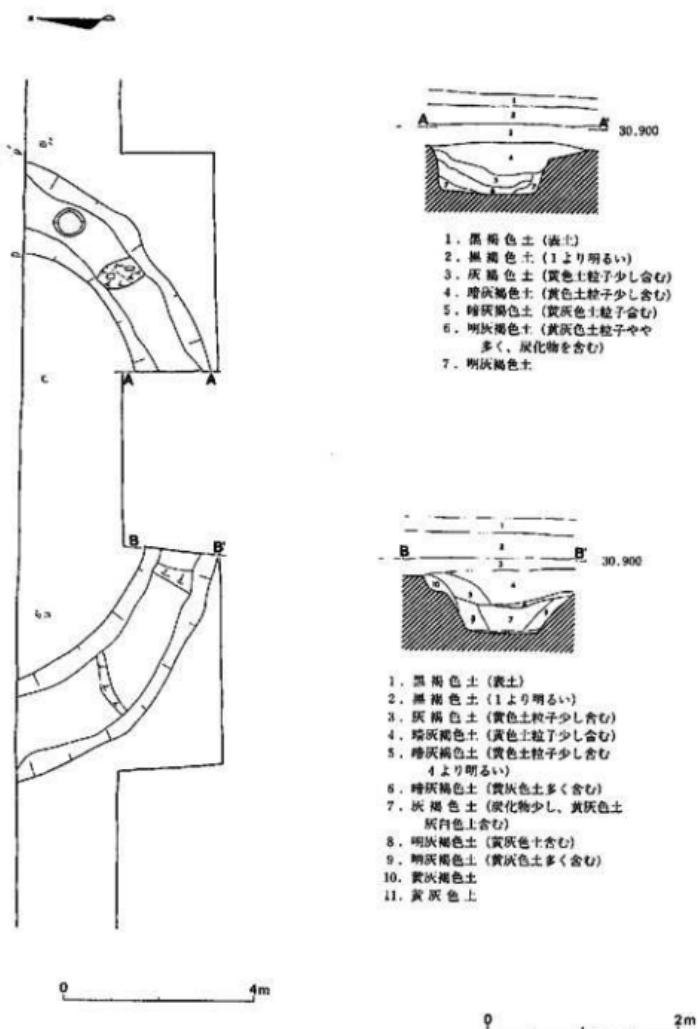
○第8号古墳跡（第11図）

II-L～N-6・7グリッドに位置する。異なった調査地点3ヵ所で確認されたものだが、それぞれごく一部しか調査できず、3ヵ所合わせても周溝全体の、10%にも満たない程度であり、詳細については明らかでない。判明した範囲では外縁の直径が21～22m、内縁の直径が18～20mほどと推定され、少し歪んだ円形を呈していたようである。幅は2.5m前後である。

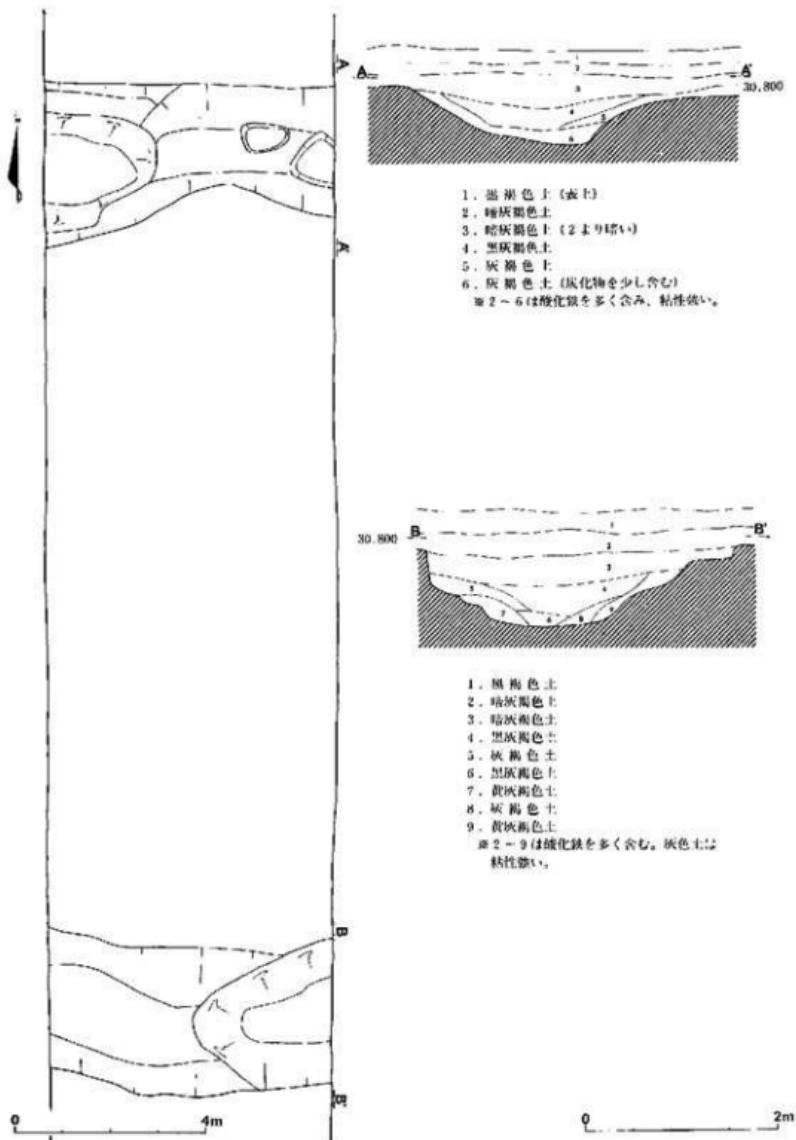
埴輪片や土師器などが出土地した。

○第9号古墳跡（第12・13図）

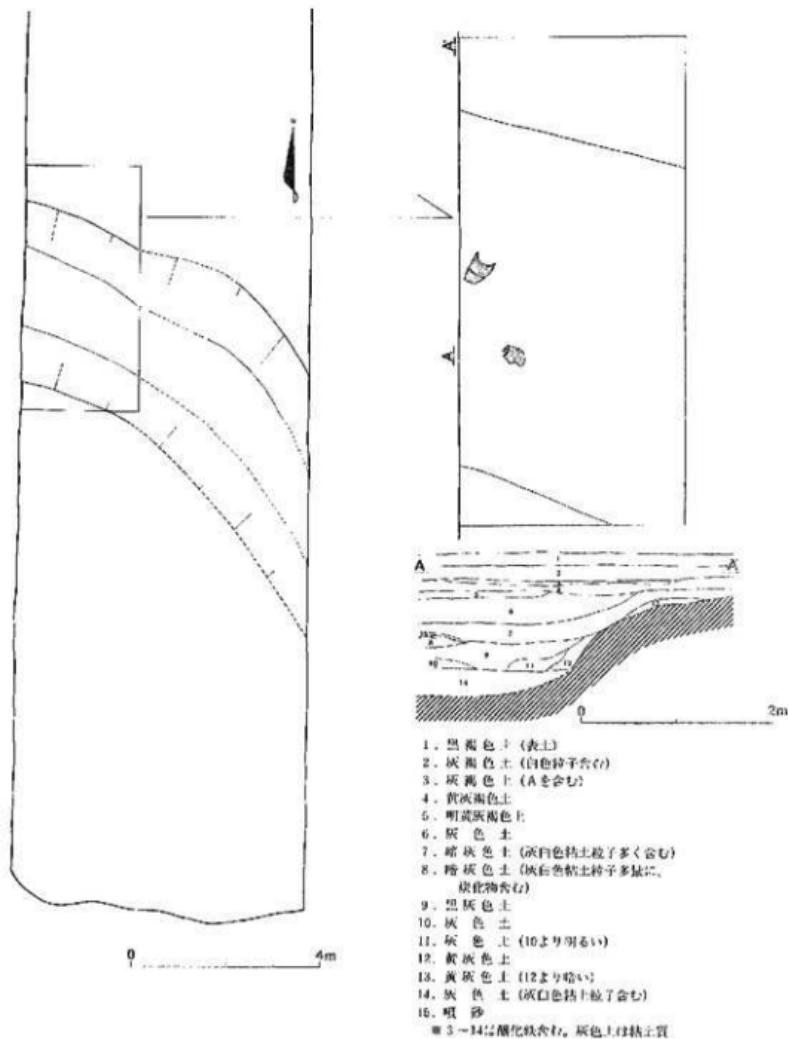
I-V-20・21グリッドに位置する。横穴式石室の一部が発見されたが、かなり破壊されており、形態や規模の詳細については明らかでない。玄室は、東辺部分が根石を含め2、3段の石積が長さ約2.5m残り、その対面にも玄室の西辺部分のごく一部が根石を含め2段ほど残っていた。奥壁部分は水田化の掘削により完全に削平されていた。葬道部は東辺のみ長さ2.4mほどが検出されたが、根石ではなく、石積みは東南方向へほとんど崩れた状態であった。この状態で判断する限りでは、全長は5m以上で、玄室はいわゆる調張りを有し、幅約1.8m（内法）長さ2.5m以上である。主軸方向はN-15°-Eである。



第8図 第5号古墳跡 (1/120・1/60)



第9図 第6号古墳跡 (1/120・1/60)



第10図 第7号古墳跡 (1/120・1/60)

構築状況は、その基礎の構造が極めて特殊である。縄文時代の遺物包含層を成す確認面からの深さ約80cmの軟弱な黒色粘質土（泥炭質土）の上に、砂利・砂・黄褐色土（ローム質）・灰褐色土（粘土質）を混ぜた土を固めて地盤改良をわざわざ施し、その上に石室を構築していた。床面は上記の砂利土で、根石は埋め込まれ、裏込めにも同様の砂利土が使用されていた。石室の石材は角閃石安山岩で、石室内壁面（根石を除く）と石積面がノミ状工具により粗く平坦に削られていた。

周溝は、石室の東約8.5mで検出された幅2.0～2.5m深さ現地表面から約125cm・確認面から70cmの外側にテラス状の部分を有する溝跡と、他の遺構との切り合いではっきりしないが、石室の西約9mで検出された幅約2m・確認面からの深さ約50cmの溝跡状の部分がそれに当たるものと思われ、外縁が25～28m、内縁が20mほどと推定される。

玄室内の床面より耳環が2点（うち1点は金環）、茨道の先端部から須恵器提瓶が出土したが、いずれも原位置を保っていたとは考え難い。（縄文時代遺物包含層は別の報告書に記載予定）

○第10号古墳跡（第14図）

III-F-11グリッドに位置する。周溝全体の、約30%の調査のみに留まった。周溝は、外縁が、直径約18m、内縁が約13mと推定される。幅は1.8～2.6mである。その深さは現地表面から60～130cm、確認面から30～100cmである。検出された周溝は全体的に浅かったものの、東方にやや傾斜する状態にて確認された。周溝の確認範囲東端部は溝状遺構により切られている。底面はほぼ平坦であった。

出土遺物は極めて少量の土師器片のみである。

○第11号古墳跡（第15図）

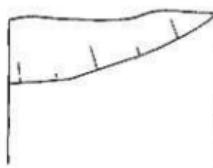
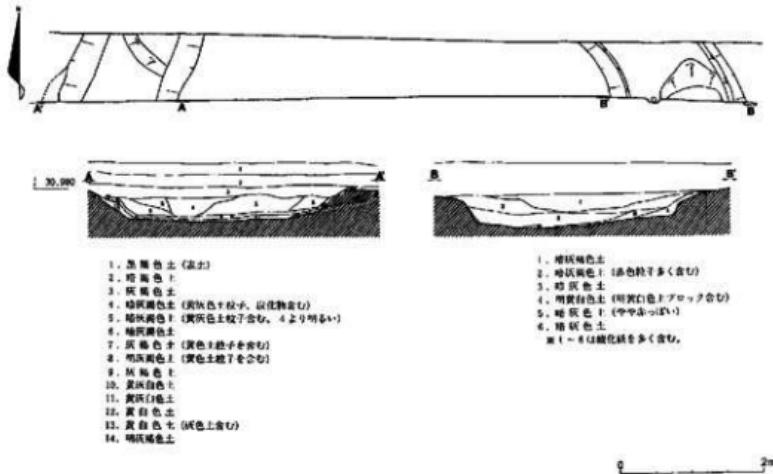
III-I-8グリッドに位置する。周溝全体の、約30%が調査したとおもわれる。周溝は、外縁が、直径約15m、内縁が約9.6mと推定される。幅は2.4～3.2mである。深さは、現地表面から100～140cm、確認面から40～80cmである。底面はほぼ平坦である。

出土遺物は円筒埴輪2個体が確認された。内1個体はほぼ完形の状態で北部より出土し、残る1個体は、上半部のみが破片の状態で北西部よりまとまって出土している（Fig. 1・2参照）。

○第12号古墳跡（第16図）

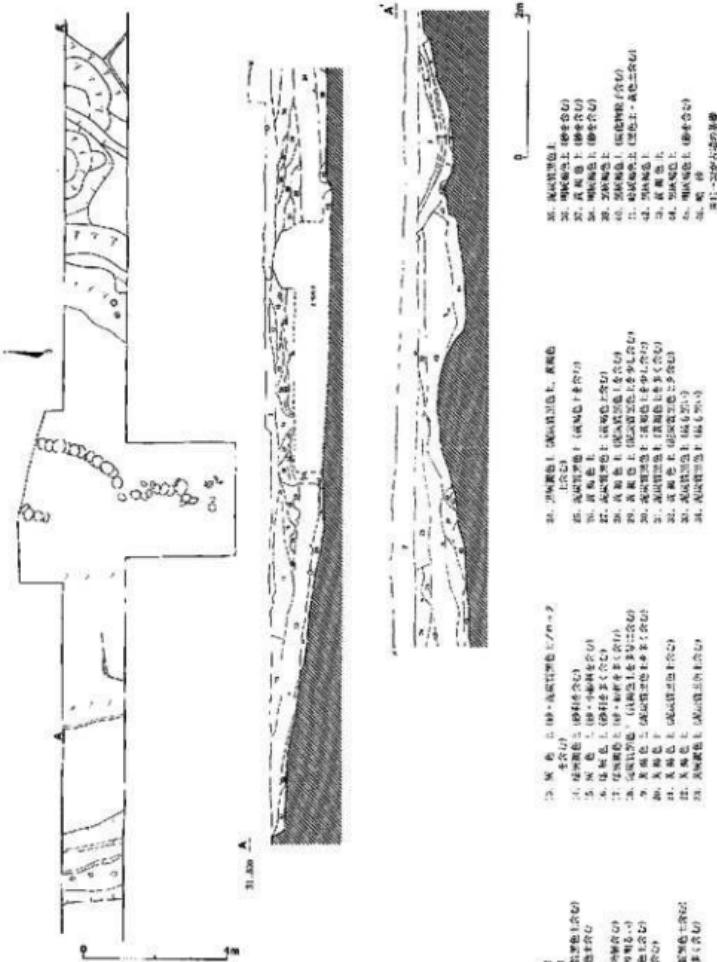
III-L-11グリッドに位置する。周溝全体の、約30%が調査したとおもわれる。周溝は、外縁が、直径約18m、内縁が約13mと推定される。幅は2.3～3.2mである。深さは現地表面から100cm前後、確認面から65cm前後である。但し、北東端部の周溝は極めて浅くなってしまっており、北東部にブリッジ状遺構の存在も推定される。また、墳丘部と周溝内縁部の間に棚状の部分が認められる。底面はほぼ平坦である。

出土遺物は埴輪片である。円筒埴輪が西側周溝の内縁部棚状部と底面に二分した状態で、人物埴輪右腕部が東側周溝北東部より出土している（Fig. 1・2参照）。

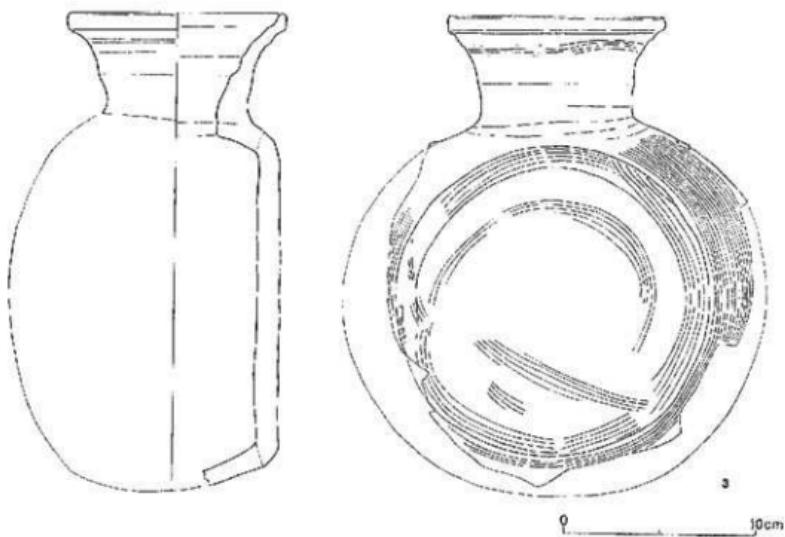
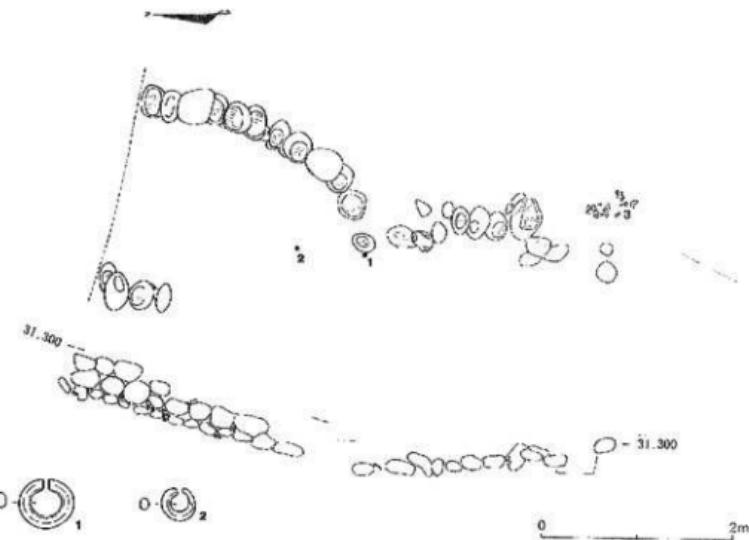


0 4m

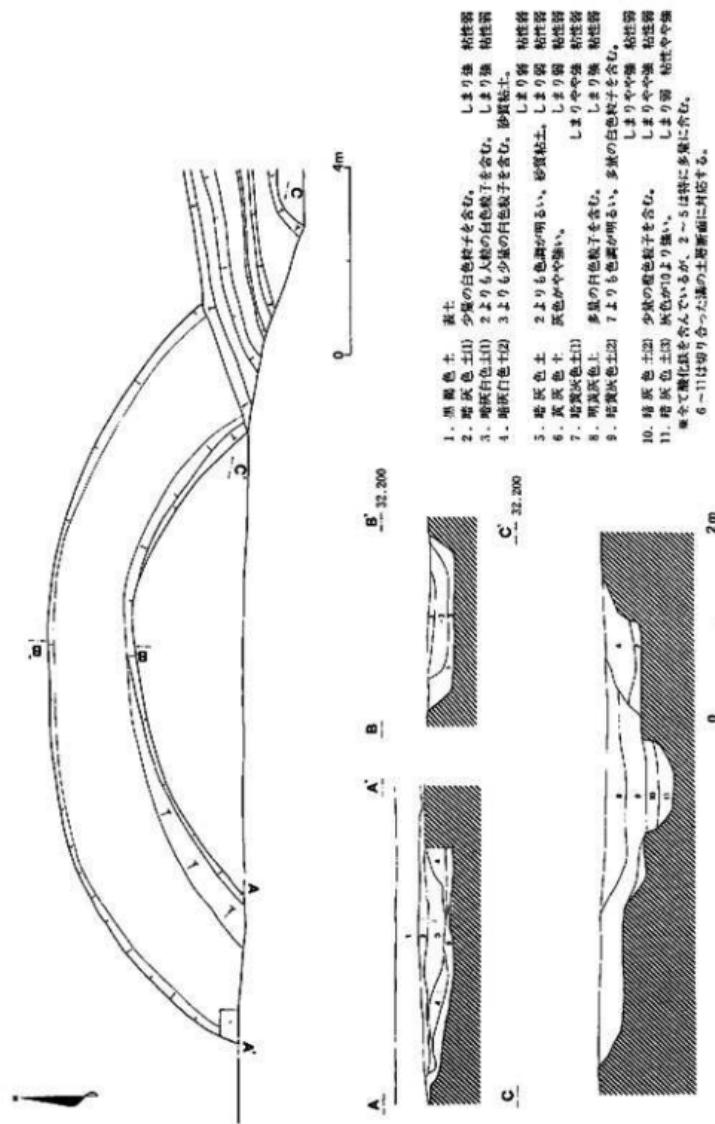
第11図 第8号古墳跡 (1/160・1/80)



第12图 第9号古墳跡(1) (1/160・1/80)

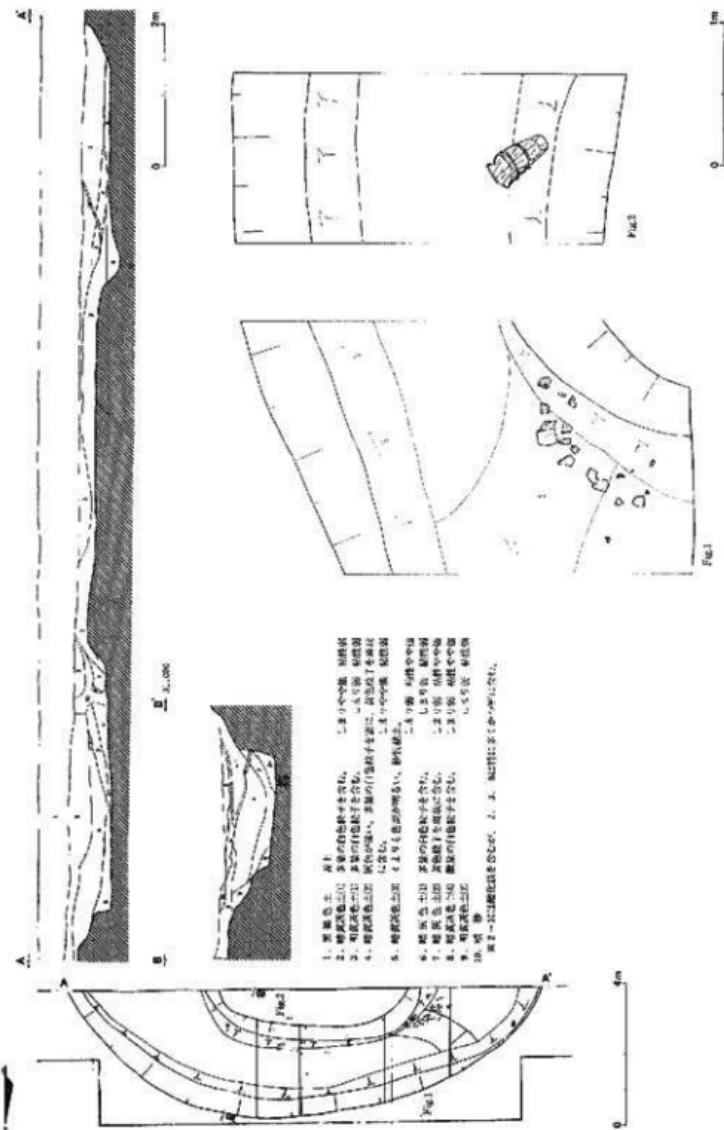


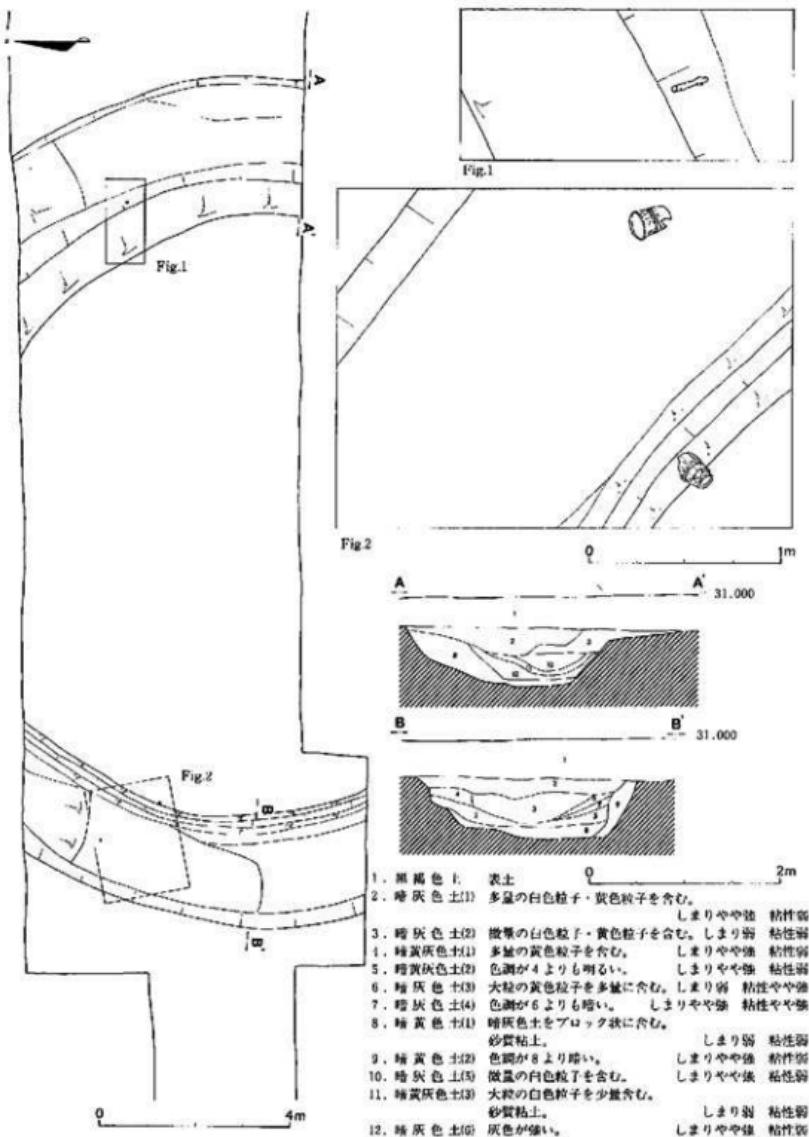
第13圖 第9号古墳跡(2) (1/60) 出土遺物 (1/3)



第10号古地図 (1/120・1/60)

第15回 第11号山崩跡 (1/160・1/80・1/40)





第16図 第12号古墳跡平面図 (1/120・1/60・1/30)

2. 出土遺物

○第1号古墳跡出土遺物（第17図1）

番号	種別	概要
1	土師器 壺	底径7.5cm。内面に横方向のハケ目明瞭。5~6本/cm。外面ナデ。底面外側から胎土をナデつけ、わずかに輪舌状。焼成良。淡橙褐色。

○第2号古墳跡出土遺物（第17図2）

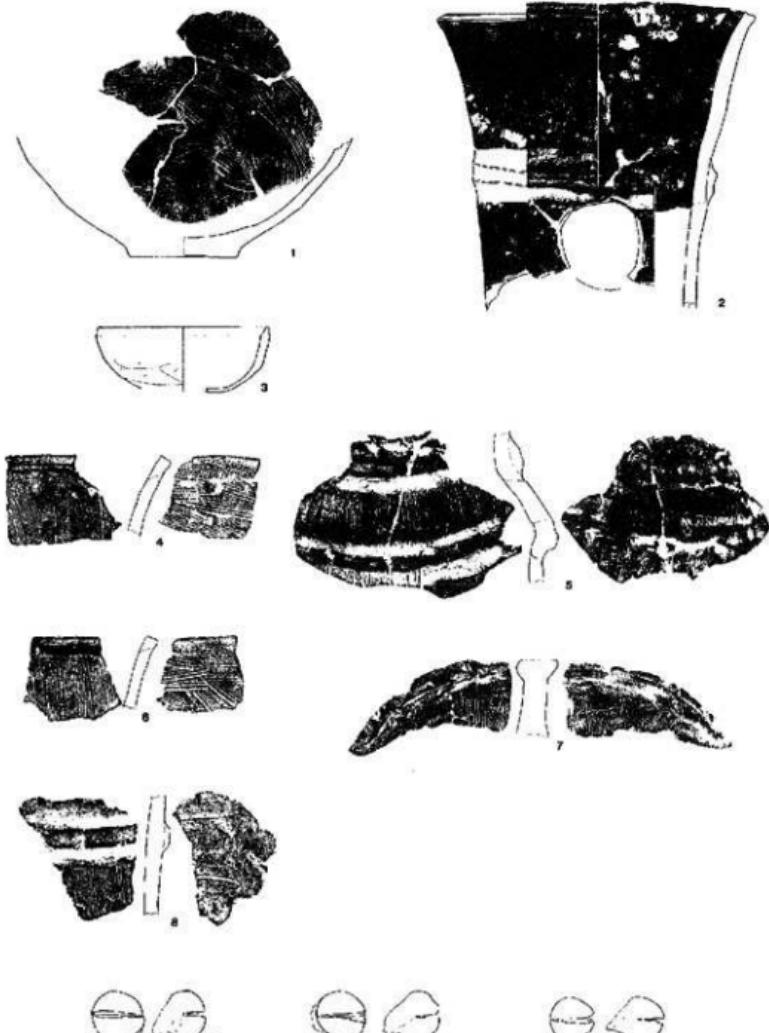
番号	種別	法量	特徴	ハケ目	焼成	色調	備考
2	円筒埴輪	口径23.0cm	突縁1条残存。断面Mに近い舌形。 透孔2孔。切取は時計回り。 器面内外面とも摩滅・剥落著しい。	13~15 本/cm	不良	橙	下半部欠損

○第4号古墳跡出土遺物（第17図3）

番号	種別	概要
3	土師器 壺	口径12.0cm。推定器高4.5cm。丸底。やや亞んだ形態。口脛部内側凹む。薄い底部かなり欠損。底面黒斑。淡橙白色。80%残存。

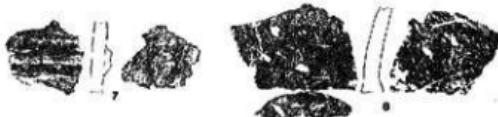
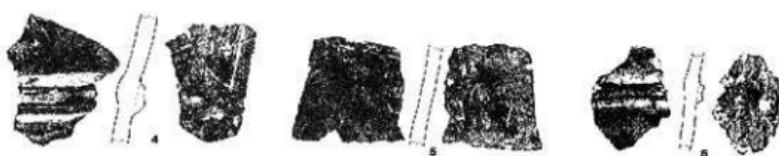
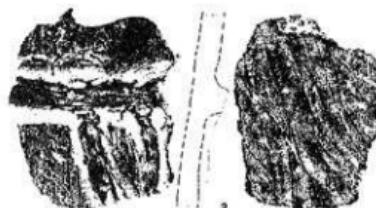
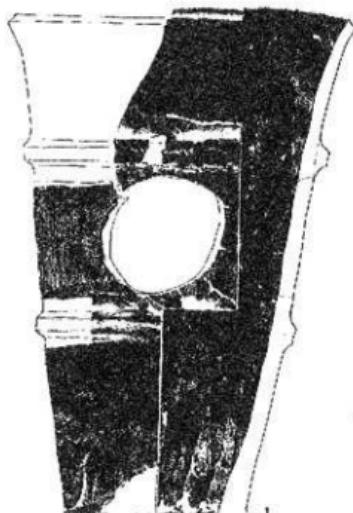
○第6号古墳跡出土遺物（第17図4~11）

番号	種別	特徴	ハケ目/cm	焼成	色調	備考
4	円筒埴輪	輪槽底内側に明瞭。	8~10本	良好	淡橙白	
5	埴輪	朝顔形の頸~肩部か。輪槽底明瞭。下位に透孔の一部あり。	7本	良	淡黄白	
6	円筒埴輪	ハケ目少なくとも2種類の工具による。	4本· 6~8本	良好	淡橙褐	
7	形象埴輪	団の下面是剥離面。	5~6本	良	淡橙白	馬頭か
8	埴輪	突帯断面舌形。	7~8本	良	橙褐	
9	形象埴輪	鈴飾り。		良	淡黄白	
10	形象埴輪	鈴飾り。		良	淡橙白	
11	形象埴輪	鈴飾り。		良好	淡橙白	



第17図 出土遺物(1) (1/4)

0 10cm



— 10cm —

第18圖 出土遺物(2) (1/4)

○第7号古墳跡出土遺物（第18図1～8）

番号	種別	法量	特徴	ハケ目	焼成	色調	備考
1	円筒埴輪	口径24.0cm 器高35.6cm 底径12.6cm	突帯2条。接着良好、一部わずかに剥落。断面はMに近い台形。 透孔2孔。時計回りに切取後、ナデ調整。 口縁部内面に拂描きのX印あり。	7～8本	良好	淡赤褐	口縁部の約1/2欠損

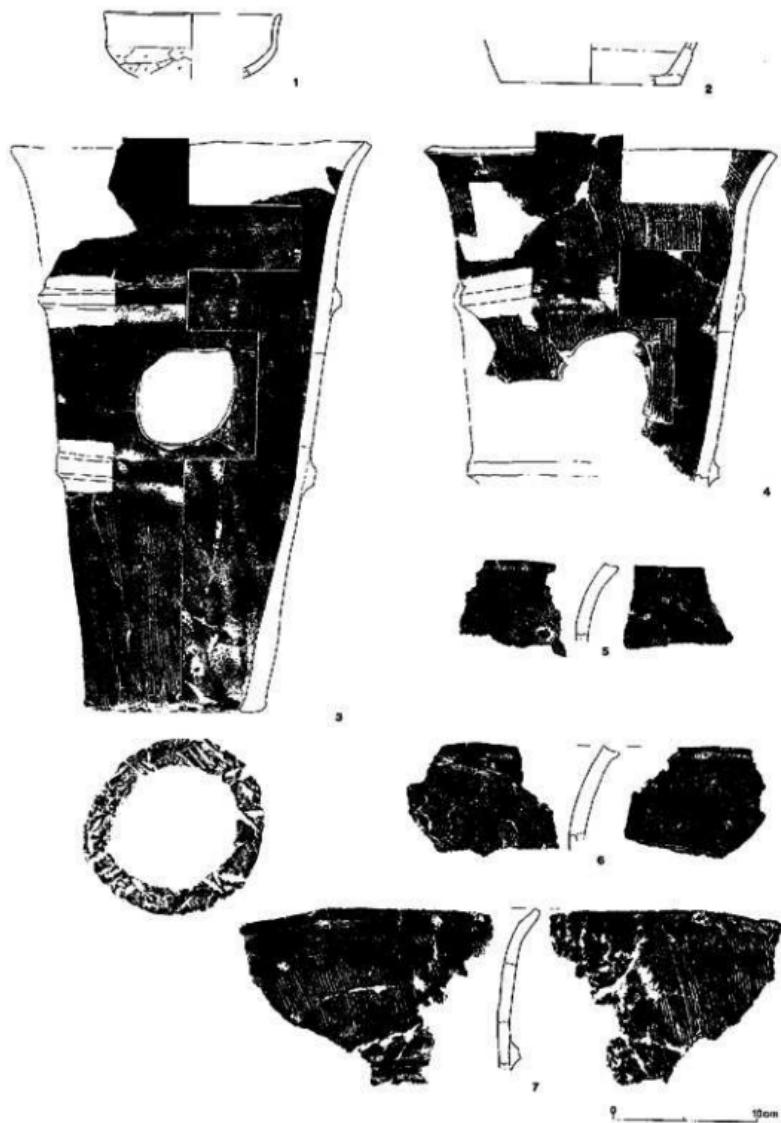
番号	種別	特徴	ハケ目/cm	焼成	色調	備考
2	形象埴輪	突帯の上面剥離。2状の隆起垂下。内面ヘラナデ。器面摩滅。	6～7本	良	淡橙	形態不明。
3	埴輪	内面ハケ目及び指ナデ。器面少し摩滅。	7～8本	良好	淡橙	半須恵質。
4	埴輪	内面指の押圧で突帯の反対側が横位に突帯状に膨らむ。器面摩滅、ハケ目不明瞭。		良	淡橙白	
5	埴輪	内面指の押圧の後ハケ目剥離。	7本	良好	淡灰褐	半須恵質。
6	埴輪	内面に指の押圧痕と指紋。	7～8本	良好	淡灰褐	半須恵質。
7	埴輪	内面指の押圧及びナデ。		良好	淡橙白	半須恵質。
8	埴輪	底部破片。ハケ目は2種類以上の工具によるか。器面摩滅。	5本～8～9本	良	内面灰 淡橙	

○第8号古墳跡出土遺物（第18図9）

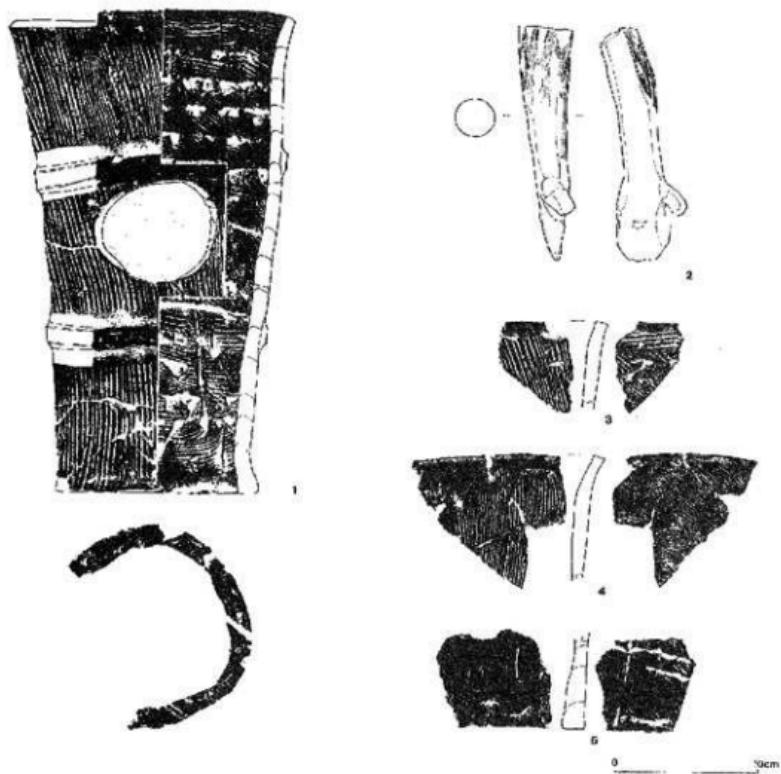
番号	種別	概要
9	土師器 壺	口径13.0cm。器高4.5cm。歪んだ形態。口唇部上面少し平坦。体部の一部が剥離するように欠損し穴があいている。焼成やや不良。淡橙～黄灰白色。80%残存。

○第9号古墳跡出土遺物（第13図1～3）

番号	種別	概要
1	耳環	2.9×2.6cm。18.0g。断面0.8×0.6cmの長円形で内側少し平坦。銅製。表面硝化（緑青）。
2	耳環	1.9×1.7cm。2.5g。断面0.6×0.4cmで内側が稜のようになる。硝化（緑青）著しく、表面の一部剥離。金銅製で内側のごく一部にわずかに金溶が残る。
3	須恵器提瓶	口径11.5cm、推定器高25.5cm、推定器幅22.5cm、推定器厚14.0cm。 頸部短く太い。胴部の残存状態はかなり悪いが、扁平な形態を呈し、比較的残りの良い側は径16.5cmほどの平坦面が貼り付けられ、横置きされた可能性高い。反対側は丸く膨らんでいたようである。構目は胴部及び口縁部外間に明瞭。把手は頸部の両側に貼付部分のみ残る。焼成良好。灰色。



第19圖 出土遺物(3) (1/4)



第20圖 出土遺物(4) (1/3)

○第10号古墳跡出土遺物（第19図1・2）

番号	種別	概要
1	土師器 坯	推定口径12.6cm、推定高さ5.0cm。口唇部丸い。暗赤橙。
2	須恵器 瓶	推定底径13.0cm。焼成良好。暗青灰。

○第11号古墳跡出土遺物（第19図3～7）

番号	種別	法量	特徴	ハケ目	焼成	色調	備考
3	円筒埴輪	口径25.5cm 器高40.2cm 底径12.4cm	突帯2条。部分的に剥落・亀裂。 断面扁平な隅丸方形。横ナデ方向は左、透孔2孔。切取は反時計回り。	13本	やや不良	赤橙	口縁部過半を欠損。
4	円筒埴輪	口径24.8cm	突帯2条。うち1条は大半を欠損するが接着は良好。断面扁平な台形。横ナデ方向は左。 透孔2孔。いずれも過半を欠損。切取は反時計回り。	9本	良好	暗赤褐	下半部を欠損。

番号	種別	法量	特徴	ハケ目/cm	焼成	色調	備考
5	円筒埴輪			7本	良好	赤橙	
6	円筒埴輪		内面灰白色。	9～10本	良好	明黄橙	
7	円筒埴輪		胎土極めて粗い。	4～5本	やや不良	暗赤褐	

○第12号古墳跡出土遺物（第20図1～5）

番号	種別	法量	特徴	ハケ目	焼成	色調	備考
1	円筒埴輪	口径20.1cm 器高33.5cm 底径14.2cm	突帯2条。一部剥落するが接着は概ね良好。断面かなり扁平な台形。横ナデ方向は左。 透孔2孔。1孔は過半を欠損。切取は反時計回り。	3～4本	良好	赤褐 一部 明黄灰	輪積痕明晰 内面下半部に黒色付着物

番号	種別	特徴	ハケ目/cm	焼成	色調	備考
2	形象埴輪 人物右手	親指を除く4指は作り出されていない。手の平側の調整極めて粗く、甲側から粘土を圧着させた痕跡あり、何かに接する形態か。甲に方形の孔あり。腕部上半部にハケ目あり。	8本	良好	暗赤橙	長さ16.7cm 腕の径 2.8cm

番号	種別	特 微	ハケ目/cm	焼成	色調	備 考
3	円筒埴輪	須恵質。輪積痕明瞭。	3~4本	良好	赤灰	
4	円筒埴輪	半須恵質。	6本	良好	赤橙	
5	円筒埴輪	胎土極めて粗い。	4~5本	不良	暗赤橙	内面暗灰色

写 真 図 版



1. 遺跡遠景



2. 調査風景

図版 2



3. 第1号古墳跡



4. 第2号古墳跡



5. 第3号古墳跡

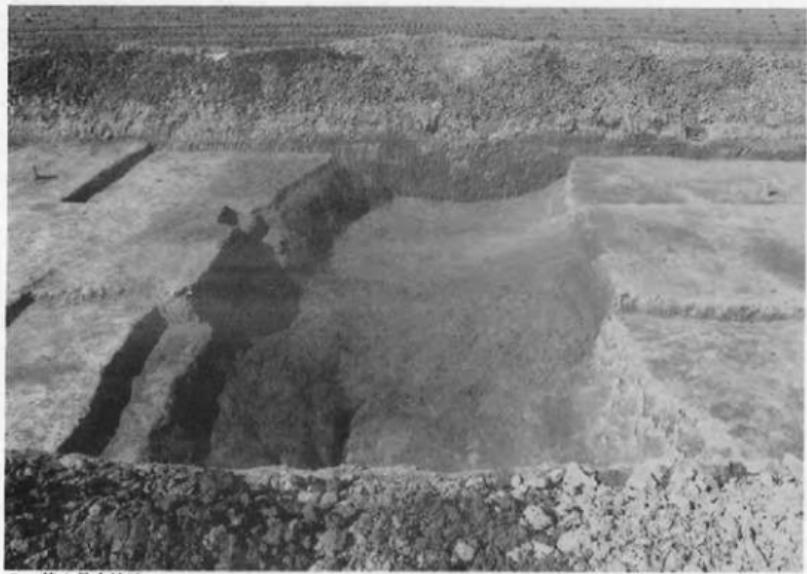


6. 第4号古墳跡

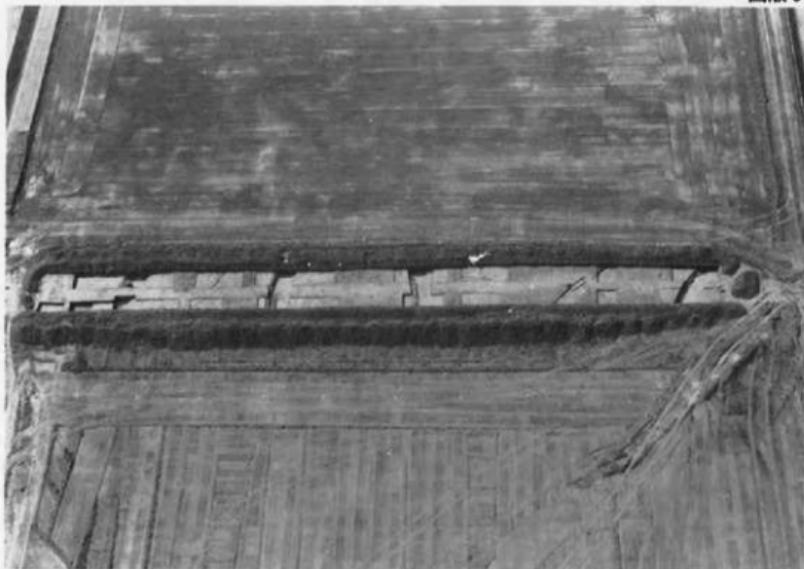
图版 4



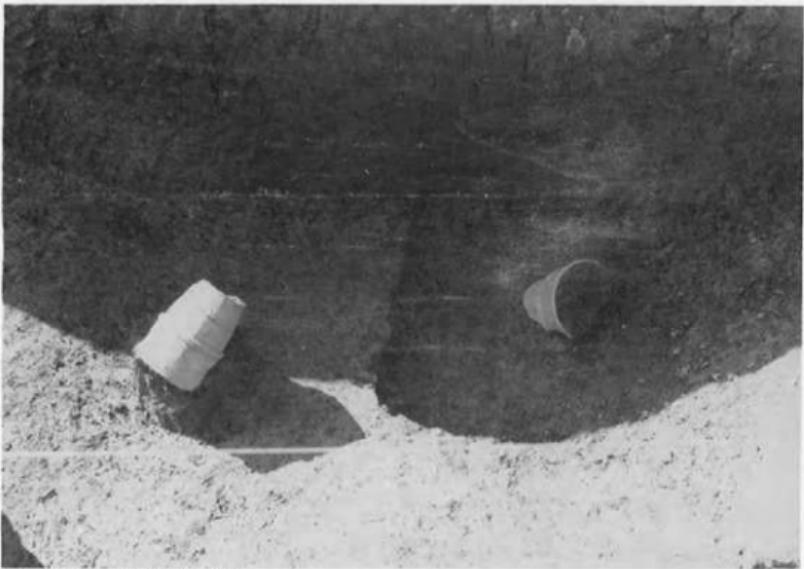
7. 第 5 号古墳跡



8. 第 6 号古墳跡



9. 第3・6・7号古墳跡航空写真



10. 第7号古墳跡遺物出土状態

図版 6



11. 第9号古墳跡



12. 第9号古墳跡耳環出土状態



13. 第9号古墳跡石室石積状態



14. 第9号古墳跡石槨内面

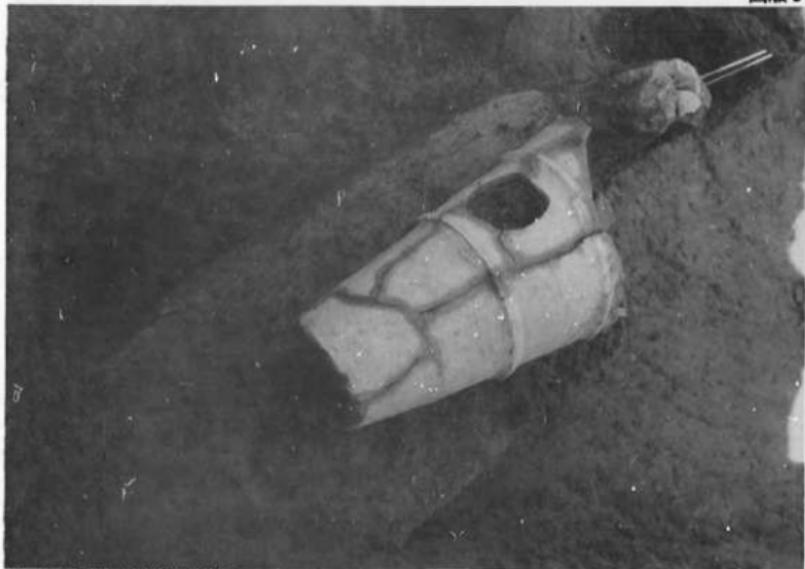
圖版 8



15. 第10号古墳跡



16. 第11号古墳跡



17. 第11号古填跡遺物出土状態



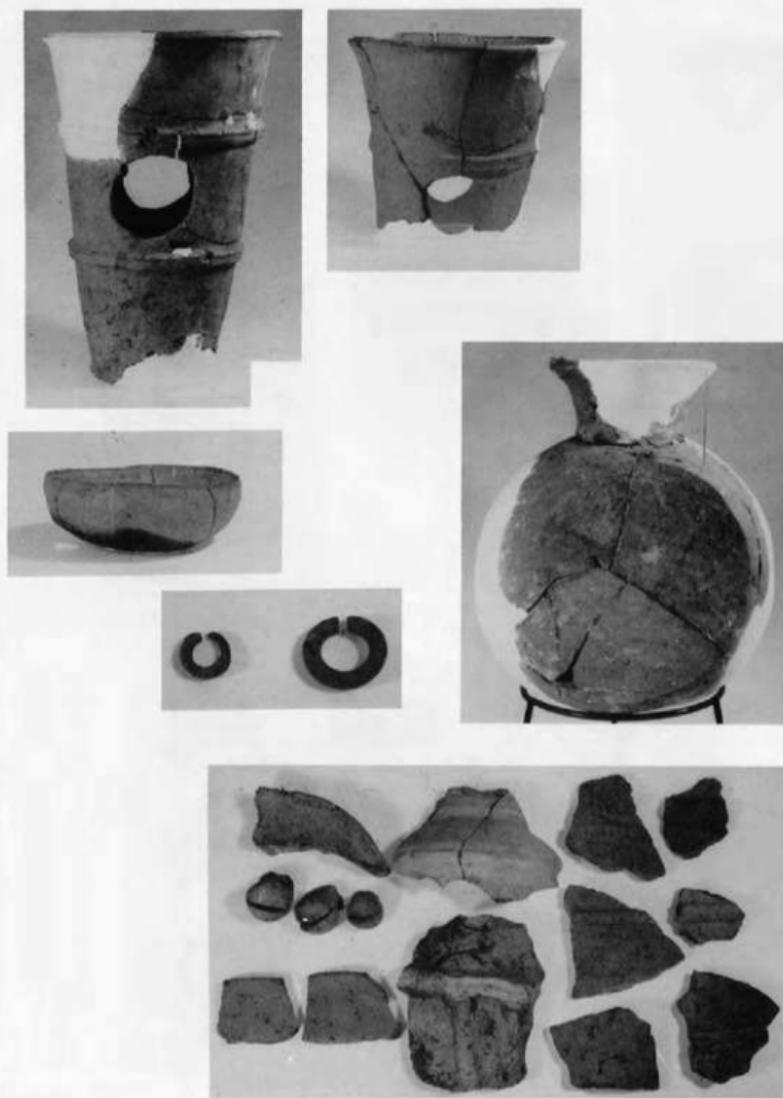
18. 第12号古填跡



19. 第12号古墳跡遺物出土状態(1)



20. 第12号古墳跡遺物出土状態(2)



21. 出土遺物(1)



22. 出土遺物(2)

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第29集

県営ほ場整備事業(明戸・南部地区)に

伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I

印刷 平成3年3月20日

発行 平成3年3月30日

発 行 深 谷 市 教 育 委 員 会

印 刷 東 洋 印 刷 株 式 会 社

「明戸南部遺跡群」 正誤表

訂正箇所	誤	正
P 3 17行目 P 7 表題	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 <u>VI</u> . 古墳跡と出土遺物	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 <u>IV</u> . 古墳跡と出土遺物
P 8 第4回	スケール数値消は、0~2m表示	